



愛知淑徳大学

URL=<http://www.aasa.ac.jp/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第7号

発行年月日：1999年3月31日

〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湊片平9

Phone 0561-62-4111 EX 498

FAX 0561-63-9308

E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

ジェンダー・女性学研究所第4回研究会報告

テーマ：「現代青年の結婚意識」

報告者：日本青年館結婚相談所 所長 板本洋子さん

開催日：1998年11月13日

結婚相談所の事業と現代結婚事情

財団法人日本青年館は文部省所管の社会教育関係団体でありそのなかにある結婚相談所は青年の人間関係疎遠化という時代背景のもとで1980年に発足した。18年間の経過のなかで活動は多様化し現在入会会員約1200名をかかえ、その属性によって相手を紹介している。マッチングのための結婚相談員もいる。出会いをつくるためにパーティ、結婚を考える講座、花婿学校、農村への対応、都市と農村の交流会等の事業を実施している。地方行政、町村行政では配偶者対策をかなりの勢いでやっているが過疎になっていく農業事情が大変厳しく農村の配偶者対策が追いつかない。農漁村の高齢化の中で結婚による世代継続は地域振興には不可欠である。そういう人たちを対象にして全国結婚問題講座も開いている。1985年（昭和60年）アジアの花嫁が農村にかなり入った。その後彼女たちはどうしているのか追跡調査もしている。

相談所に来る男性は30代後半～40代が多く親が来ることも多い。その人たちを通して社会が見える部分がある。結婚相談所を利用するというのは、結婚したい人が来るので、どうして結婚したいのかわかる。結婚したい男女の特徴として、来所者の平均年齢が1980年より10年間で約7～8歳上昇した。以前は20代後半から来ていたが今は20代の男性はほとんど来ない。35歳～44歳が60%を占めている。四大卒の男性が66%大学院、短大、高専などを入れると70%になる。30代になって独身だと会社で肩身が狭い、親がうるさい、適当な相手に巡り会えないという。高学歴、高年令、兄弟の構成は一人っ子、長男、後とりなど親との日本独特の関係があるのが特徴だ。

彼らが女性に望む条件ベスト3は、まず年令にこだわる。若ければいいというよりもなぜか、彼らは、35歳にポイントを置く。35歳以上だと産むのも、育てるのも大変だと考えるのであろう。男性は自分の歳に関係なく45歳の人も相手の女性の年齢は35歳までというラインを引いてくる。だめなら仕方がないけれども最

初からどうでもいいとは言わない。初婚にこだわる。自分の親と同居可能な人というのがベスト3である。

また相談内容は男性の場合、女性との付き合いかた、話題、交際術、女性は結婚をどの程度真面目に考えているか等。大学を出て30代の人が何を話しているのかわからない、女性の前では話せない。男性のほとんどが今のままの自分を全面的に優しく受け入れてほしいと願っている。男性が受け身で女性の言葉を待っている。自分をわかってほしいという態度もこれらの男性に共通している。デートと仕事どちらが大切かと聞くと仕事に決まっていると即座に答える。社会にでると経済効率を第一に考える仕事中心の経済ロボットのような生き方になりがちである。日本の現在の産業別構造の中では結婚相手となるような男女の自由が極めて限られている。仕事中心の生活を送る男性たちは結婚というのは安らぎの場として暖かい家庭と生活を管理してくれる母親がわりの妻という伝統的な結婚を望んでいる。家事や育児も協力するとは自分が家事の担当主体であるとは思っていない。

女性の場合は25歳～34歳までがもっとも多く60～70%を占める。35歳から急激に減る。35歳を過ぎると結婚というふた文字に対して見切りをつける。男に見切りをつけるのではなく恋をすとか、いい出会いを求める。

女性の入会理由は、収入の安定したサラリーマンと恋愛をして結婚したいということだ。自分の収入は男性の6～7割で、男性の収入をあてにしている。また自分の仕事に強い継続意欲はない。これが主婦10年ほどしてから主婦の思秋期が始まる要因であろう。

現代青年の結婚意識はかなり高くいろいろな生き方の一つとして結婚を考えている。人と人との出会いを期待して結婚することで自分がどう生きていけるのか探りたいと思っている人たちが多い。

詳しくは報告冊子が刊行されていますのでそれをご覧ください。

結婚に関する大学生の意識調査

藤丸 郁代 愛知淑徳大学女性学男性学研究会（モルガウ）

今日結婚の特徴として、「晩婚化、未婚化」「結婚する・しないは個人の自由という考え」「事実婚・DINKS（子どもをつくらない共働きのカップル）・国際結婚の増加や結婚式・ハネムーンなどの多様化」があげられる。私たちは、学生が「結婚」に対してどのような考えや意識をもっているのか知り、結婚について考えるために、アンケートを実施した。その結果の一部を報告する。

・調査方法

調査対象：愛知県内の4つの大学

調査期間：1998.10.19～11.9

調査方法：各大学でアンケート用紙を配布し、その場で記入してもらい回収した。

調査結果：対象者417名（女性269名 平均年齢19.9歳）
（男性148名 平均年齢20.1歳）

アンケートの主な内容

：対象者の性別・年齢／結婚の意思／結婚意識50項目（「そう思う～そう思わない」の5段階評定）／自由記述

・結果

表 結婚の意思（あなたは結婚したいと思いますか）

	()内は%			
	はい(%)	いいえ(%)	どちらともいえない(%)	計(%)
女性	218(81.0)	9(3.3)	42(15.6)	269(100.0)
男性	117(79.1)	10(6.8)	21(14.2)	148(100.0)
計	335(80.3)	19(4.6)	63(14.2)	417(100.0)

表は「あなたは結婚したいと思いますか」という問に対する回答の頻度を集計したものである。全体の80.3%が「はい」と答えている。厚生白書（1998）によると、「いずれ結婚するつもりである」と答えたものは女性89.1%、男性85.9%となっている。質問のしかたが異なるので直接の比較はできないが、大学生では「結婚したい」という意思がまだ低いと考えられる。この問に対する χ^2 検定の結果（ $\chi^2(2) = 2.61$ $p > 0.05$ ）男女の差はみられなかった。

次に「結婚意識50項目」について因子分析をおこなったところ、5個の因子がえられた。それらの5つの因子はまず、結婚することは当たり前・老後は安心・結婚は一生に一度のことなどをあらわした「結婚スタンダード」、第2は女性が家事・育児に専念するのはよくないという「さよなら結婚スタンダード」、第3は結婚すると自由でなくなる・結婚にはマンネリ化がつきものであるなどをあらわした「結婚の束縛と倦怠」、第4は収入や学歴を重視しないで愛が大切であることをあらわした「愛さえあれば」、第5は結婚には関心が高く、学生のうちに相手を見つけないという「早く結婚したい」である。女性が有意に高かった因子は、「さよな

ら結婚スタンダード」($F = 1.36$ $p = (146, 265)$ $p < 0.01$)、「結婚の束縛と倦怠」($F = 1.40$ $df = (141, 266)$ $p < 0.05$)、「早く結婚したい」($F = 1.03$ $df = (267, 146)$ $p < 0.01$)であった。男性が有意に高かった因子は、「愛さえあれば」($F = 1.34$ $df = (267, 145)$ $p < 0.01$)であった。このことから、女性は、結婚に関心があり、早く結婚したいと思っているにもかかわらず従来の結婚の形に対しては反対で、結婚には束縛と倦怠を強く感じているという矛盾した意識を抱えている。また、男性は結婚に「愛」をもとめているが、女性は結婚をより現実的にとらえているようだ。

自由記述からは、女性は働き続けたいが、結婚・出産・育児で仕事をやめる傾向がある。働き続けたとしても、家事・育児は基本的には自らやらねばならないことと考えている。男性には分担・協力してほしいと願っている。一方男性は、自分はやらないから女性に家事・育児を担ってほしい、男性自身は結婚しても働き続けるという考えである。このように、意識では「さよなら結婚スタンダード」=性別役割を否定しているけれども、結婚という形をとるとはっきりと性別役割があらわれてくるのがわかった。女性は、結婚前には否定的だった性別役割について、結婚して子どもができれば仕方がないと、家事・育児を担う。そういう生活を楽に行えるために、結婚の条件の中で、相手の経済力とやさしさ（妻の家事役割をどれだけ助けてくれるか）が重視される。学生のうちに将来性のある相手をさがそうと懸命になり、そのさがし方は、友だち同志で情報を提供しあいながらすすめられる。

男女の関係はお互い愛し愛されて結婚（恋愛をして結婚する）という過程が前提である。結婚して幸せになりたいと思い、結婚後も恋人のような関係、ずっと仲のよい関係、お互いよき理解者でありたいと望んでいる。

現代の大学生は、性別役割を否定しつつも、結局は性別役割を受け入れてしまう結婚後の生活と幸せを求める自分自身との間で、「結婚すること」を考えている。そしてこれが大学生の結婚の意思が低い傾向をしめす理由のひとつになっているのではないと思われる。

この調査対象者の学生の所属大学は、愛知教育大学、愛知学院大学、中京大学、愛知淑徳大学である。ご協力ありがとうございました。

なお、このアンケート結果は、昨年のウィルあいちセンターフェスティバルの県民参加イベントで「あっと驚く結婚の話」というテーマで発表したものである。調査報告書も近刊の予定である。

離婚について

大橋 由佳

近年、メディアで「離婚」についての表現が変化し、イメージもかなり変化してきている。女性タレントを筆頭に一般に女で仕事を持つ人が多くなり、自立した女性が増加した。他方、離婚する女性も増加している。従来、離婚する女性は、「見勝手」「気まま」「自分中心」という批判が多かったが、近年ではシングルマザーとして一人で生活できる女性の新しいライフスタイルを肯定的にとらえている。離婚に対するマイナスイメージが少なくなってきたと感じられる。

年間離婚者数も20万組を超えた。離婚観が着実に変化している証拠であるが、現実には社会的圧力から離婚できないでいる人（特に女性）や親の離婚に振り回されている子どもがたくさんいるのである。いまだに日本人の意識の根底には「家父長制」が植えつけられているからである。

離婚の法的手続きは協議離婚／調停離婚／審判離婚／裁判離婚があり、選択できるが、その背景には多くの問題が残っている。特に私は次の3点の問題に注目する。第1に夫の暴力、第2に離婚における子どもの権利保障、第3に民法改正案要綱要旨第7条一項の5年別居問題である。

夫からの暴力は妻特有の離婚申立理由の第1位を占めている。現実には妻の3人に1人が夫から身体的暴力をうけている。夫婦間による暴力は民事不介入のため、なかなか解決しにくい。男性は力による一方的征服だけでなく言葉の暴力としても女性を精神的に傷つけている。妻は長い間身体的、精神的暴力が続くと、それに耐えようと我慢し、いつの間にか「離婚しよう」という気がなえてしまうのである。離婚したくてもできないでいる女性はたくさんいるのである。又暴力は、離婚原因としてだけでなく、日常的なドメスティック・バイオレンス（DV）として女性特有の悩みの種となっている。

離婚は夫婦間の問題であるため、子どもがいるから離婚を我慢する、ということは子どもにとってもありがた迷惑である。しかし有子離婚の場合、親権者の決定、その他子どもの監護に関する事項、子どもに影響を及ぼす事項については、子どもの存在を無視して離婚をすすめてはならない。児童権利条約で離婚に関しても、子どもの権利が多々認められているが、現実には大きく損なわれている。

児童権利条約第9条「親からの分離の禁止」3項は、子どもの親に対する面接交渉権を認めている。しかし親の都合で決定され、子どもの意見は反映されないことが多い。また、児童権利条約第6条及び27条4項は、養育費の支払の確保が規定されている。現実には、養育費について取り決めせず離婚していたり、決定通り支

払われていなかったりする夫婦が大半である。日本では特に母子家庭の経済事情が極端に悪いことから、非親権者の養育費支払確保が重大な問題となっている。児童権利条約第12条「意見を表明する権利」にあるように、児童に影響を与えるすべての事項について子どもが自由に自己の意見を表明する権利が保障されているが、離婚に関しては、裁判離婚の際に15歳以上の子どもについてのみ意見聴取が義務づけられているだけである。協議離婚、調停離婚の場合の子どもに影響を及ぼす事項について広く子どもの意見聴取を義務づけるべきである。日本は協議離婚者が多く、離婚の自由が確保されているという点ではよいが、有子離婚における子の利益尊重という点では、不明確な点が多いのが現実である。

離婚により多くの子どもの利益が損なわれている現状のため、公的機関による関与が必要である。離婚の自由の問題と、子どもの利益をどのように調和させることができるかが今後の問題である。

離婚原因に5年別居を導入しようということで現在問題になっている。しかし単身赴任など諸事情で別居している夫婦はたくさんいる。物理的に別居5年経過で離婚が成立することは単に離婚率の上昇の手助けとなるだけであり、特に女性に多くのデメリットを与える離婚原因となるであろう。現在の要綱案のままでは男性に都合のいいように解釈されやすい表現のものが多く、乱用される危険性があるように感じられる。

だが、前述したように「男は仕事、女は家庭」という固定的役割意識がまだ日本人の意識に根付いたままである。しかし現実には結婚継続という道を歩むことが不可能となっている夫婦は多い。今後、男女の意識改革がされなければ、日本の離婚観（結婚観）は建て前のままであり続けるであろう。男性は女性を従属物扱いすべきでないし、特に日常での言葉による従属的支配には注意すべきである。女性は男性から、社会保障制度の面でも自立すべきである。離婚後の社会保障制度体制の不備や女性の自立困難な社会システムといった課題も山積みであるが、一人の個人としての生きがいをもち、自己実現することは日本女性にとっていまだに不可能に近い。

他方、男女不平等を訴える前に、女性自身が信頼できる責任感のある存在となり、男女が「結婚とは、離婚とは何か」ということを充分考え、確たる理解を持てば、結婚／離婚の道の選択は意義あるものとなるであろう。「家族ごっこ」の夢を見る人が減らない限り、変わりつつある日本の夫婦／家族像は建て前のままであり続けるであろう。

（1999年3月本学卒業、卒論テーマ「離婚」）

Good bye and Thank you Everyone!

Barbara Struthers

As I cleared Immigration that first day I arrived, and walked out into the beige reception area, I realised that this, surprisingly, was it - I was finally in Japan. The parking lot was next and the welcoming mat of kilometres of road construction lined by a hodgepodge of buildings that have broken free from any sense of aesthetic. Then a second realisation anxiously rushed in upon the first one - this was not a pretty city. (I had imagined Dr Seuss green ball trees, and fresh water streams with orange carp, everywhere I looked.) Right from the beginning my experience differed from my expectations.

One morning a little while later I choked awake in my apartment to find it filled with burning plastic gas fumes. I was not totally surprised, by this stage. It was an intense, uncomfortable experience though, so I went outside and tried to stop my kindly, old neighbour lady from burning all her 'unburnable' trash on the road outside my window. What did she do when I spoke to her? She nodded, squinted at me and muttered something, and then totally ignored me! The cocktail of my poor Japanese, excess emotion, cross purposes, and pajamas on the street combined to make this a poor first experience of environmental protest in Japan. I laughed about this at the time; but it also chilled me. As I was confronted that morning with the idea that I might not be able to stand up for myself and my beliefs here like I could 'at home'. I reacted badly to that idea.

Activism

Some months later I inquired at my school office about International Women's Day events as March 8 was just a few weeks off. By this time I was quite keen to meet some women with feminist consciousness and get some relief from the stories of the slave women who were telling me they got up at 5am and make their husbands a '10 course' breakfast - and that they didn't mind at all! (I really thought they were joking, at first. Then I was flabbergasted by their 'mindless compliance'.) The office staff didn't know about IWD; but they knew someone who might know...So they introduced me to Kuniko Kato who runs a small feminist, alternative primary school in Nonami. ('Twas my lucky day' - as she's an amazing, broadminded and active person.) She told me, however, that no-one was doing anything in 1996 as the usual IWD organisers went to Beijing (in 1995), and were too beat to get a 1996 IWD event together. But would like to meet Sakiko Kato at the YWCA?

Sakiko turned out to be another woman on fire in this town, and Kuniko thought that she would like to do an IWD event with me. It was then that I realised that she thought I was wanting to organise an event. This was kind of shocking to me as I thought no-one would want a 'foreigner' to start organising things here, therefore her conclusion and support seemed kind of remarkable. I immediately went into a self-talk session, however, on whether or not it would be culturally insensitive of me to do it. Not wanting to let Kuniko down, I decided to go ahead. I met with Sakiko and as she was really sparked by the proposal that we do a Japanese and foreign style event together; she jumped into the project immediately. I remained surprised.

This led to a two-week dash around our other commitments to set up a mini IWD festival to celebrate the day. It differed from the usual style IWD events in Nagoya in that it was open to the general public, it involved feminist songs, invited foreigners and was held outdoors. Maybe a hundred people came. It was small. Still, everyone involved got really buzzed from it, so it's been considered a success. It was the precursor to the public events that have been organised by a multi-cultural group of women each year since. These events have become bigger and more adventurous. Last year was pretty good, and IWD 99 will be quite an experience.

Still, I have worried off and on about the appropriateness of (my) foreigners' roles. Am I/we really welcome to be joining in and trying to better' community consciousness etc., away from home? Are my/our ideas really suited to this culture and context anyway? Am I/are we insulting people? Is it really OK to see yourself as living in an International Community and to act accordingly? These questions haven't stopped me from getting involved, they just prowl my conscious at times...Despite my niggling concerns however, the Japanese women I've been working with in these projects seem really excited about working with foreigners and the 'outside' support that this represents to them. They keep encouraging me/us to do more. This response is quite different to what I had expected, and also heartwarming.

I have gained an enormous amount from what these Japanese activists have shared with me, and I have been able to express things very close to my heart in a country where such ideas are reportedly so unwelcome. So really I'm glad I didn't listen to the censors, and not

get involved. I think, that perhaps we are sometimes not justified in trying to conform to mainstream cultural guides for behaviour in countries different to our own, as each culture is in flux and the guides are generally produced according to the most conservative values practised in the community. Paying attention to the feedback you get from the local people you respect would seem a more reliable guide to me. So, even where I now see I could have approached some things with more culturally informed understanding, the experiences that arose from my naivete were opportunities for good learnings for all concerned. (I think more good than harm has resulted overall!) It was really important for me as a perennial community activist to be able to participate in Japanese society from that activist framework. Despite, not having learnt to speak Japanese well (cringe, cringe), I have had the opportunity to appreciate the intricacy of this culture so that it's not so monolithically strange to me anymore. I can see the subcultures within the community now, and the processes of struggle the groups that desire change are undergoing. It's quite similar to home in that respect, and it makes me feel more at home to connect with it.

Teaching

You soon realise when you start teaching in Japan that most peoples values are still encased in the mummified restrictions of chauvinist thinking. To be fair, sexism is not the only conservative thinking one finds- and Japan is not the only country where its found. But as a woman used to challenging sexism in my own community, of course I was immediately struck by the extreme degree that it's practised here.

As a foreigner teaching my language and culture, I have found it important to emphasize the difference in mainstream Japanese thinking about gender roles, and female value, and the less sexist thought found in some Japanese groups, and in other industrial nations. In Australia I'm always conscious of using non-sexist language, examples, materials and curriculum and classroom behaviour. At A/S, I've had sufficient autonomy to continue this practise in my classrooms; but I know that most of the school, and the outside Education Board has no such committment. In fact, I have found a committment to improving the status of women in this society to be quite lacking. A saving grace for A/S is the Gender Studies centre, even if it may have been the price the administration paid to turn the rest of the university into a football totting male preserve.(?) Also important for the students and staff here are the small number of well-placed women on the staff who seem conscious of the need to enhance

women's opportunities and experience. It must be a difficult balancing act for them, and I hope they get a lot of encouragement and support as they are definitely valuable members of staff. Most of this campus, though in my opinion, could have been transported through a timewarp from a conservative area of the States the 1950's.

Sometimes hierarchical structures are easy to conflate with sexist ones; I suppose that's because hierarchies are so often controlled by narrowly defined 'masculinist'/sexist values. When I go to the administration office, the international exchange office, the President's office - am I observing only a rigid hierarchical structure at work? I don't think so. It would appear that the systems I've observed operating are inherently chauvinist and designed to subjugate the female members of staff. Contracts that terminate in 5 years for female clerical staff, tea service by female staff members (!), and general kowtowing to male staff members are just the surface of the chauvinism problem operating on this campus. I can't imagine what a critical examination of the gendered working conditions, curriculum, and teaching practises would reveal; though I'm sure it would be appalling to anyone with an 'equalist' perspective. Meaning, of course, that female students are not as well served as they should be by these systems.

Having noted the Administration's response to a case of flagrant sexual harassment of students by a previous staff member, I think it's no wonder for example, that A/S does not yet have a responsible anti-sexual harassment policy or practise. The operative values of the A/S administration have not yet broken free from the chains of deeply misogynist thought and practise. (In the case mentioned the offending staff member was told not to be concerned about punishment as his behaviour was not viewed as harassment or abuse, but as activities in his private life! Incredibly enough! A similar response to that of the judges in Yokkaichi who gave no punishment to two men found guilty(!) of abduction and premeditated rape.)

Perhaps if consumer rights consciousness develops more strongly here, female students and their parents will start to insist on a higher standard and fair treatment. Then the abolition of sexism will become an economic argument that would have to be attended to, in order to maintain the viability of the university. One always hopes that universities will take the higher moral ground and not wait for economic necessity to force them to do the right thing; however, when universities are private enterprise, this ideal would seem, unfortunately, to fall on fallow ground. Or will

we be surprised sometime soon, by the A/S Administration initiating their own genuine review and upgrade of the practises governing staff and students on this campus. As I've already mentioned, I have been impressed by the greater than perceived on the surface, interest in and ability to change, in this country. I hope that again my expectations will be superceded by a more positive outcome than current evidence suggests!
Good luck everybody! (ASU Lecturer)



【要旨】

オーストラリアへの帰国を前に、
～日本とASUでの体験を振り返って～
'99年3月まで本学教員：バーバラ・ストラザース

日本に到着し、落ちつくまでの日々はたいへんだった。写真などでみた日本の印象とは全く異なる情景に当初は期待はずれも多かった。日本語もままならず、日本での生活適応は骨の折れる作業だった。日本の主婦たちの日常生活を聞いてショックを受けた、朝5時に起床、朝食に10皿ものおかずを用意するなどということに当たり前のこととしてやっていると聞いたことも驚異だった。

大学で国際女性の日に何か開催事業をと考えて、担当者などに交渉したが、その日のことを知っている人はほとんどいなかった。やっとYWCAの女性で共に行動を起こせる人に会えた。しかし外国人がこうした事業を企画することは無理だと皆がいうことにまた驚いた。しかし日本人と外国人と一緒に国際女性の日に事業をするというアイデアによってくれる仲間にて会えた。事業は各種のトーク、歌など次第に大きな企画となった。しかしふと考えた、私のような外国人がこうした事業を推進する主要な力となることは一体どういう意味があるのだろうか。日本の人に失礼じゃないだろうか、日本の人々は私のやり方を本当に受け入れてくれているのだろうか、そして文化的に無理なことをしようとしていないだろうか等不安になった。しかしだからといって行動をやめることはない。

この行動の結果として私は日本で思いを同じくする人々から多くの協力と支援をもらえた。主流の保守的文化はこうした行動様式は受け入れられないかもしれないが、しかし受け入れる日本人も多くいることがわかった。

教育の場はとても形式主義的で、男性主導的だ。性差別的な行動様式が今も日常にあふれていた。1950年代の母国にいるような気分になった。大学事務局では男性主導で、女性は補助的役割をしている。その多くの女性事務職員は男性と異なりパートで5年以内の契

約期限だという。英語を教える教師として大学生に異なる文化のあることを知らせることが重要だと考えた。性差別的でない文化を伝え、授業では私の考えを実行し、セクシズムの表現を修正することも教えた。セクシュアル・ハラスメントの事例もあり、学生や職員とも話し合ったときに、この学内にまだセクハラに対処する手順が確立されていないと痛感した。女性たちがもっと公平な扱いを要求するようになり、大学側もそうした要求に対処することが望まれる。

(本学教員)

こんなことで困ったら

愛知淑徳大学の学生、職員、教員、嘱託職員、派遣職員などで教育環境、職場などで次のようなことに遭ったら、躊躇せずに相談してみましょう。

- 1) 差別的なことをかけられた(人権侵害、民族差別、人種差別、性差別、障害者差別など)
- 2) セクシュアル・ハラスメントを受けた(意に反してさわられる、抱きつかれる、しつこく誘われる等)
- 3) 教育、業務目的として2)の行為を受ける。
- 4) デイト・レイプ、デイト・セクシュアルハラスメントに遭う。(親しい友人、尊敬する上司、先生だが意に反して性的脅威、いやがらせを受けた、レイプを受けた等)
- 5) アルバイトや就職活動のときに相手企業の人から性的嫌がらせなどを受けた。
- 6) その他学外であっても本人に耐えられない人権侵害、性的いやがらせを受けた。

本学関係者一同、こうしたことのない学問研究に適した快適な大学にするため日々努力を重ねていますが、万一このようなことに会ったら、一人で悩んだり、我慢せずに以下のところにご相談ください。女性・男性の専門家がやさしく対応してくれます。また各クラスには教授がアドバイザーとしてついていますので、この方に相談してみてもできます。

相談先

- 1) 学生部学生課：事情をお聞きします、専門部署紹介
- 2) 学生相談室：専門家によるカウンセリング
- 3) 就職課：就職活動において生じたことについての相談、指導
- 4) 心理臨床相談室：学生あるいは元学生、あるいは一般市民が専門家に心理相談することができます。(有料)
- 5) ジェンダー・女性学研究所：情報提供、資料文献紹介、弁護士・カウンセラー・シェルター等の紹介

ジェンダー・女性学関連ジャーナル購読について

本研究所所長 國信潤子

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所としてジェンダー・女性学関連の日本語、英語のジャーナルを多く定期購読している。その数は24件ある。英語のジャーナルはアメリカ合衆国、英国のものである。また日本国内の学会誌では日本女性学会の「女性学」、日本

女性学研究会の「女性学年報」をはじめとして女性学研究会の「女性学研究」など主なジェンダー・女性学研究誌をすべて購読している。最近東海地区で設立された財団で東海ジェンダー研究所が「ジェンダー研究」誌を創刊し、この地区でも次第に研究・教育活動が定

着してきている。今この領域の研究機関は日本全国で17カ所ある。

今回は本研究所の予算から購読している和英のジャーナルのいくつかを、学内外の方々の研究目的に供していただくべく紹介する。ただし愛知淑徳大学でこれらのジャーナルは大学図書館の新刊ジャーナルコーナーに新刊号が、そしてバックナンバーは図書館地下の書庫奥深くにバックナンバー専用書庫に納められている。しかも「禁帯出」扱いなので持ち出し、借り出しは不可能である。不便ではあるが保管、整理は確かである。その書架にいくと国内では一カ所にこれだけの和英のジェンダー・女性学関連資料を集めたところは、関東を中心とした5カ所くらいで、東海地区では他にはないだろう。また廃刊になった「日本婦人問題懇話会会報」など女性組織の定期刊行物なども寄贈を受け、保管している。

そのなかでも歴史も長く、もっともジェンダー・女性学の最先端をゆく論文をのせているのがアメリカで刊行されているSIGNS - Journal of Women in Culture and Society - である。すでに23年の歴史があり、創刊時はCatherine R. Stimpsonが編集をし、スタンフォード大学に編集局があった。その後シカゴ大学さらに今はワシントン大学が編集局を担当している。最新号(23-3)をみると「若者文化とフェミニズム」を特集しており、ロックミュージックとフェミニズム、そして若い女性の文化的学習についての論文が巻頭にある。また多文化主義を貫徹しており、チカノ、アラブ、アフロ・ブラックなど書き手も地球規模である。また先号(23-2)ではJudith Butlerへのインタビュー記事があり、そのなかでも彼女の話作のフェミニズムからの心身論考察を詳細に鼎談形式で論じている。ジュ

ディス・パトラーは今カリフォルニア大学バークレー校で教鞭をとっており、彼女のジェンダー論には多くのファンがいる。しかし彼女の論点が十分に咀嚼されていないので、このような鼎談形式で質問に答え、またそれへのコメントをするという形式は読者には親切で有用である。

その他本研究所では国内の日本女性学会、日本女性学研究会など日本で初めて女性学と名をつけた研究誌をだした組織の研究誌を購読している。例えば日本女性学会はその学会誌「女性学 第6号」で「教育の場からジェンダーを問う」というテーマで「学校におけるジェンダー・フリー教育と女性学」(館)、「専門教育科目としての女性学」(萩原他) などの特集論文を掲載、また海外情報として「パレスチナの女性団体の現状」などの記事もある。また日本女性学研究会の「女性学年報」は国内ではもっとも古くから女性学研究誌を刊行しており、最新号は19号である。その研究誌は研究者のみでなく在野で女性学を深く研究する人々を掘り起こしていることが他と異なる。その編集方針として学問に女性の視点をいれること、女性であることから出発し、自分たちの視点を反映するメディアを自ら創ることなどを挙げている。最新号では「女の身体：その表現と表象」を特集し、興味深い、独創的な論考を掲載している。また勤草書房刊で女性学研究会編集の「女性学研究」は4号目を96年11月に出し、そのテーマを法制度にしばり、「日本型ジェンダーを問う：性分業家族優位の税・社会保障制度の改革を。」(塩田)で制度面のジェンダー・フリーを展望している。

いずれの女性学研究誌も大学生ならば十分読めるものであり、広く学生にも読まれることを期待したい。

ジェンダー・女性学関連研究誌、機関誌購読状況

日本語

1. 女性学 日本女性学会刊 新水社刊
2. 女性学研究 女性学研究会編/ 勤草書房刊
3. 女性学年報 日本女性学研究会
4. ジェンダー研究 東海ジェンダー研究所
5. 日米女性ジャーナル
日米女性ジャーナル編集部編、刊
6. 婦人展望 市川房枝会館編、刊
7. 月刊女性教養 (財)日本女子社会教育会刊
8. 21世紀の女たち
アジア女性資料センター編、刊
9. ウィメンズ・ブックス 松香堂編、刊
10. Click Click編、刊
11. 女性情報 パドウィメンズ・オフィス編、刊
12. 国立婦人教育会館研究紀要(寄贈)
国立婦人教育会館刊
13. NWEC情報 国立婦人教育会館刊(寄贈)

英語

1. SIGNS University of Washington ed.
/ Univ. Chicago Press
2. Feminist Studies Feminist Studies Inc.
3. Feminist Review Sage Publication
4. Women's Studies International Forum
IPC Magazines
5. Gender and Society Sage Publication
6. Feminism and Psychology Sage Publication
7. Psychology of Women Quarterly
Cambridge University Press
8. Journal of Gender Studies
Women's Research Program
9. Women's Journal IPC Magazines Ltd
10. MS. MS. Editorial
11. Sex Roles ~ Journal of Research ~
Plenum Press

*この他ジェンダー・女性学関連研究所のある大学刊行の関連研究誌の寄贈も受けています。

お茶の水女子、大阪女子大学、城西国際大学、神戸女子学院大学、昭和女子大学、橘女子大学、東京女子大学、東横学園大学、アジア女性交流研究センターなどがあります。

今、ASUのジェンダー論、女性学が面白い!! (一般の人でも受講できます) 1999年度前期 愛知淑徳大学、ジェンダー女性学関連の開放講座

現代社会とジェンダー-1

「文学における愛とセクシュアリティ」(13回)

毎週木曜日 15:00-16:30

恋愛は近代における最大の発明品である。恋愛という近代的感情と、それを支えてきたセクシュアリティを作家論と作品論を通して学ぶ。

回	月/日	テーマ	講師
1	4/15	恋愛という概念、セクシュアリティという装置	教授 小倉千加子
2	4/22	高村光太郎・智恵子-女の言葉を封じた男-	講師 中島 美幸 (『フェミニストジェネラル Fifty Fifty』共同編集発行人)
3	5/ 6	与謝野晶子・鉄幹-男の多情をも創造の源とした女-	
4	5/13	日本語で「愛」が語れるか-言語とジェンダー-	作家 山下智恵子
5	5/20	大庭みな子-「三匹の蟹」から「浦島草」へ-	
6	5/27	森 瑠子-「情事」から「ダブルコンチェルト」へ-	愛知淑徳短期大学助教授
7	6/ 3	山下智恵子-「幻の塔」にみる革命運動の中の性-	
8	6/10	「フランクシュタイン」にみる女の欲望と怪物	平林美都子
9	6/17	「ジェイン・エド」における女のセクシュアリティの抑圧	
10	6/24	「ダロウェイ夫人」にみる「レズビアン・パニック」	教授 小倉千加子
11	7/ 1	母親の間に打たれた横槍-内田春樹「オザンファッカー」後の論議-	
12	7/ 8	「入江直樹」という男と少女漫画の王道「イタズラなkiss」の愛-	
13	7/15	まとめと課題	

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。

定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。
 さらに、この条件を満たした上で、レポート提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。

テキスト 特になし。

現代社会とジェンダー-2

「芸術とジェンダー表現」後期(12回)

毎週木曜日 15:00-16:30

ジェンダーとは、私たちの頭の中にある男女の違いについての思い込みのことである。この思い込み(=信念)によって強く支えられているものに芸術がある。絵画・映画・パレエ・演劇・建築・TVドラマ等、多岐のジャンルにおいてその基盤であるジェンダーの前提に、近年疑問が投げかけられ、問い直しが始まっている。この講座では、芸術の各ジャンルにおいてジェンダーが今までどのように表現されてきたかと、それに対する批判的問題提起を各界の専門家が論じる。

回	月/日	テーマ	講師
1	10/ 7	表象としてのジェンダー	教授 小倉千加子
2	10/14	描かれたジェンダー-中世から近代まで-	金城学院大学講師 大嶽 恵子
3	10/21	文明批判とジェンダー、そしてフェミニズムの視線	
4	10/28	映画「第七官界彷徨-尾崎翠を探して」	映画監督 浜野 佐智
5	11/ 4	映像表現と監督のジェンダー	
6	11/11	落語における女性と笑い	落語家 桂 あやめ
7	11/18	越境するジェンダー-パレエの中のエロス-	評論家 藤本由香里
8	11/25	ジェンダーの視点から見た文芸批評	朝日新聞記者 伊藤 景子
9	12/ 2	住宅空間のしつらえと男女の生活	建築家 神田 雅子
10	12/ 9	ジェンダーフリーな自己の解放と表現	演出家 芹川 藍
11	12/16	翻訳とジェンダーの日本文化比較	通訳 三明 幸江
12	1/13	90年代TVドラマの挑戦-ポピュラーカルチャーの記号論-	教授 小倉千加子

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。

定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。
 さらに、この条件を満たした上で、レポートを提出又は、試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。

テキスト 特になし。

現代社会とジェンダー-3

(12回)

毎週火曜日 15:00-16:30

地球規模で進展する経済のグローバル化によって、昨今では開発途上国と先進産業国の格差の拡大が問題となっている。物質的な豊かさを追求してゆくその究極には、厳しい南北格差があるとするれば、何のための豊かさか問題となるだろう。開発途上国の人々の中には多国籍化する労働環境のもとで基本的な生活基盤の確保もままならない実態がある。外国人労働者の増加も今後さらに進行するであろう。この問題について南北社会問題をジェンダーの視点から探求するのがこのオムニバス講座の目的である。

回	月/日	テーマ	講師
1	4/13	オリエンテーション:なぜ今開発と女性を考えるか	教授 國信 潤子
2	4/20	開発と女性・ジェンダー(1)	日本福祉大学助教授
3	4/27	開発と女性・ジェンダー(2)	
4	5/11	開発と女性・ジェンダー(3)	生江 明
5	5/18	開発とジェンダーの現状-スリランカの場合-	教授 國信 潤子
6	5/25	日本の政府開発援助とジェンダー	国際協力基金 田中由美子
7	6/ 1	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(1)	名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程 星山 幸子
8	6/ 8	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(2)	
9	6/15	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(3)	
10	6/22	日本の外国人労働者の実態(1)	名古屋カトリック国際協力委員会
11	6/29	日本の外国人労働者の実態(2)	野上 幸恵
12	7/ 6	女性にとっての開発の意味	アジア女性資料センター代表 松井やより

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。

定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。
 さらに、この条件を満たした上で、レポート提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。

テキスト 特になし。

現代社会とジェンダー-4

後期(12回)

毎週火曜日 15:00-16:30

グローバル化する経済のもとで、開発途上国と先進産業国の格差の拡大が進行している。経済の発展とは物質的な豊かさのみでなく、人々の人権意識をも育てるものである。物質的な豊かさを追求してゆくその究極には、厳しい南北格差があるとするれば、そうした豊かさには疑問が残る。開発途上国には基本的な生活基盤の確保もままならない人々が多すぎる。外国人労働者の増加も今後さらに進行するであろう。このオムニバス講座では、この南北社会問題をジェンダーの視点から探求する。国連、NGO活動、保健リーダー養成などの活動の最前線にいる人々を講師にお迎えする。

回	月/日	テーマ	講師
1	10/ 5	オリエンテーション:開発・ジェンダーとは	教授 國信 潤子
2	10/12	開発におけるジェンダー関係	名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程 星山 幸子
3	10/19	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(1)	
4	10/26	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(2)	
5	11/ 2	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(3)	
6	11/ 9	開発とジェンダー理論と実践(1)	日本福祉大学助教授
7	11/16	開発とジェンダー理論と実践(2)	
8	11/30	開発とジェンダー理論と実践(3)	生江 明
9	12/ 7	開発と保健-アジアの保健-(1)	アジア保健研修所所長 川原 啓美 愛知国際病院院長
10	12/14	アジアの保健と開発実践(2)	アジア保健研修所職員
11	12/21	アジアの保健と開発実践(3)	林 かくみ
12	1/11	21世紀における開発と新たなジェンダー関係	教授 國信 潤子

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。

定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。
 さらに、この条件を満たした上で、レポート提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。

テキスト 特になし。

女性と社会 (各12回)

本講座は、前期・後期とも同じ内容となりますので、いずれかのコースを選択ください。

毎週火曜日 9:10-10:40

現代社会における男女の社会的関係の変容は顕著なものがある。女性の高学歴化、就労率の上昇、そして高齢化社会、少子化時代など「伝統的」性別役割は変容してきている。従来のように女性が家事・育児・介護という無償労働領域のみに限定されていたは社会全体がパランスを欠き、しかも女性差別の解消が不可能となり、男女の平等な関係形式にも障害となる。他方40・50年代の日本男性の自殺率が国際比較からみても高いことは、「男らしさの罫」が男性のより自由な生き方をせよとあり、家族の経済基盤を一人の男性が生にわたって担うことが不可能になりつつある。男らしさ、女らしさを固定的な性別イメージにとらわれず、自分らしい生き方の創出の道を考える。

回	前期 月/日	後期 月/日	テーマ	講師
1	4/13	10/ 5	統計データ、各種意識調査にみる男女の格差、国際的女性差別撤廃の趨勢、日本社会独特の固定的性別役割分業、意識としての「イエ」意識、独身貴族とモラトリアム期間の延長、性の商品化、性暴力、主婦の座の保護の意味、夫婦別姓、雇用機会均等法第二次法、男女共同参画社会の意味などについて紹介し、討論する。	教授 國信 潤子
2	4/20	10/12		
3	4/27	10/19		
4	5/11	10/26		
5	5/18	11/ 2		
6	5/25	11/ 9		
7	6/ 1	11/16		
8	6/ 8	11/30		
9	6/15	12/ 7		
10	6/22	12/14		
11	6/29	12/21		
12	7/ 6	1/11		

日程及びテーマは一部変更になる場合があります。

定員 前期・後期各25人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。
 さらに、この条件を満たした上でレポートを提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。

テキスト 「女性学教育・学習ハンドブック」国立婦人教育会館編 有斐閣(約2,000円)

編集後記

99年世紀末の年、本研究
 所の活動も次第に全国の大学
 の同種の研究所とのネット
 ワークを強化し始めまし
 た。全国10の関連研究所所長会議が昨年末、京
 都で開催されました。今後は本研究所もこうし
 た連携強化に貢献したいと考えます。今号は結
 婚・離婚がテーマです。ご感想等をいただけ
 と幸いです。